

平成 27 年度 海外臨床薬学研修報告書
「海外臨床薬学研修を通して学んだこと」
研修期間：平成 27 年 7 月 15 日～7 月 27 日
研修先：サンフォード大学薬学部及び関連施設

薬学部薬学科 6 年

100973471

若原 美沙紀

私は、7月15日から27日まで13日間、アメリカのアラバマ州バーミングハムにあるサンフォード大学およびその周辺の医療施設において海外臨床薬学臨床研修に参加させていただいた。5年次に病院・薬局の実務実習で日本の医療現場における薬剤師の地位や役割を学んだことで、アメリカと日本の薬剤師の違いを実際に学び体験したいという気持ちがあった。研修では大学の教員の方々による講義を受け、大学周辺の医療施設を訪問することでアメリカの薬学教育制度・医療制度・臨床現場における薬剤師の役割を学び、日本とアメリカの相違点やお互いの優れている点、問題点を知ることができた。

サンフォード大学は各国の薬学部と国際交流を行っており、今回の研修にはわれわれ日本の薬学生だけでなく、韓国とエジプトの薬学生も参加していた。韓国はアメリカと同様に2年間大学に通った後に薬学部で4年間学ぶ教育制度をとっている。一方、エジプトの薬学教育は5年制であり、医療現場は発展途上であるとのことだった。各国の学生と国際交流を行うことで他国の医療の現状や薬学教育、文化的背景を知ることができ、とても良い刺激となった。

大学での講義内容には、アメリカの薬学教育制度・カリキュラム、医療保険、代表的な疾患（敗血症・心不全）の病態と治療、異業種間連携、疼痛コントロール、抗凝固剤、医療安全、韓国の学生による高血圧の症例報告、小児への治療等の講義が含まれていた。

アメリカでは、2～4年の大学を卒業した後に薬学部に入學し、4年間の専門的な薬学教育を受ける。サンフォード大学では実際に病院や薬局で働いている薬剤師が講義を行っているため、より臨床現場に近い講義受けることができると感じた。アメリカの薬学教育カリキュラムでは、IPPEという1年次から3年次に最低300時間の実習が組み込まれており、薬局などの実際の臨床現場で実習を行う。4年次には海外の薬学部への短期留学を含め、薬局・病院・クリニック等を1施設4～6週間程度でまわり1年間で最低1440時間以上の実務実習を行う。1年かけて多くの施設で研修を受けることができ、さらに海外での研修も選択できるため様々な経験を積むことができ、学生はより広い視野と選択肢を持つことができると感じた。日本では1年次から4年次まで大学の講義を受けた後、5年次に11週間ほどの薬局・病院実習を行うため、授業のみでは自分の知識と実際の治療を結びつけることが難しく、5年次の実務実習を経験することで大学の講義の重要性を感じる事ができた。薬学部卒業後は国家試験（NAPLEX）を受験し、更に自身が働く州の試験に合格することで薬剤師資格を取得することができる。薬剤師として働き始めた後は、1年に15時間以上の生涯学習が推奨されており、大学で講義も行われている。大学での講義を受けながら、同時に実際の現場でも研修を行うことで早期から薬剤師の役割や責任を認識・実感することができ、さらに卒業後の生涯学習を続けていくことで薬剤師の臨床現場における活躍や高い地位の確立へと繋がっているのだと感じた。また、アメリカは様々な医療保険があるため、保険の有無や患者がどの保険に入っているかによって使用できる薬剤が異なる。その点日本は皆保険制度を導入しており、すべての患者に対して適切な薬剤を自由に選択することができ、世界の医療の中でも優れている点であると感じた。

今回の研修では、St.Vincent's Birmingham（私立総合病院）、Jefferson County Department of Health、Princeton Hoover、Christ Health Center（クリニック）、FMS Pharmacy（薬局）の5施設を訪問することができ、私はSt.Vincent's BirminghamおよびPrinceton Hooverの2施設を訪問させていただくことができた。

St.Vincent's Birminghamは私立の総合病院であり、診療科や病棟のほかに、Bruno Cancer Center & Physicians Plazaのようながん患者が通院治療を受けるための施設等があり、とても環境が充実していた。日本では医療従事者による治療の記録はほぼ電子カルテ上で行われていたが、アメリカでは医師の診察結果や看護師の記録は紙カルテにも記載してあった。病院ではサンフォード大学の学生が実務実習を行っている最中であり、PC上の記録と紙カルテを利用して患者の治療経過や問題点を抽出し、治療方針の提案について指導薬剤師とディスカッションする様子を見学させていただいた。

Princeton Hooverは慢性疾患の外来患者用クリニックであり、日本の小さな個人病院ほどの規模という印象を受けた。臨床検査、医師の診療後には、指導が必要な禁煙・糖尿病・喘息等の患者には薬剤師が個別の部屋で指導を行っている。一人の患者に対して、15分以上は面談・指導の時間を使うとのことだった。

また今回訪問することはできなかったが、バーミングハムにはChildren's Hospital of Alabamaという小児科専門の大きな病院があり、その周辺にも多くのクリニックや医療学校が存在して医療都市となっていた。

今回の海外研修を通してアメリカや各国の医療や教育の特徴を知ることができ、改めて日本の医療の良い点・問題点を知ることができた。アメリカの薬剤師の医療現場における活躍や地位の確立には、大学の薬学教育制度が大きく影響していると感じた。4年間の薬学教育過程で積極的に臨床実習を取り入れ常に現場で働く薬剤師を見ることで、業務や責任を学び経験することができ、自身が薬剤師として働くイメージを持ちやすく日々のモチベーションを高く保つことができる。日本の薬学部でも5年次の実務実習を通じて薬剤師の役割や責任を現場で経験することができ、自身が薬剤師としてなすべきことを考える良い機会となるため、学生自身の積極的な実習への取り組みが大切であると改めて感じた。これから社会に出て働く際には、薬剤師として患者のために何ができるかを常に考え、積極的に医療に参加していきたいと思う。

最後に、今回このように有意義な研修を経験させていただいた関係者の方々に深く感謝致します。各国先生方や学生との交流で得た経験を活かし、社会に出て活躍できる薬剤師を目指したいと思います。